京都の新しい公立大学

福知山公立大学

The University of Fukuchiyama

地域経営学部　地域経営学科／医療福祉経営学科

〒620-0886 京都府福知山市字堀3370
TEL.0773-24-7100　FAX.0773-24-7170

http://www.fukuchiyama.ac.jp

地域協働型実践教育
2016年度 成果報告書



はじめに



2016年4月に本学は私学から福知山公立大学に生まれ変わり、再生しました。

私たちが掲げた基本理念は市民の大学、地域のための大学、世界とともに歩む大学です。ですから、大学のホームページのご挨拶で、私はこの大学は市民と学生が地域でともに学び合い、福知山という地域から世界に向かって開かれた知の拠点を目ざしますと書きました。

この理念のもとに教育研究の場で試みているのが本学の「地域協働型実践教育」です。

2016年度は、金曜日をこの授業の日とし、教室で行う通常の他の科目の講義時間は組まずに、1～4回生全員がそれぞれに選択したテーマにしたがって担当の教員とともに地域を訪問し、住民の方々から話を聞き、共に地域の課題について考え、その解決の方向性について検討するという授業の日としました。もちろん、毎回、地域を訪問するわけではなく、教室での事前学習や訪問後の課題の整理や検討も行いました。

このような年間を通じて試みた新たな授業の全体を「まとめ」たのが、この小冊子です。

ご覧いただけば一目瞭然ですが、決して充分なものではありません。担当の教員が、今年度この科目でどんな授業を行ったかをごく簡単にまとめたものに過ぎません。学生諸君が寄せているのは、感想のようなほんの一言二言です。学生諸君が自分たちでこの報告書を書くようになったとき、自分たちは何をどう学び、次の学習課題をどう考えたかなどを自分の言葉で語る報告書になるだろうと思います。

今回はそこまで到達していません。具体的な学習の場や方法とその成果などが生き生きと伝わり、学生諸君の学びの息吹が伝えられるような報告書づくりを目ざしていこうと決意しています。その出発の第一歩とご理解いただき、今後の成長を暖かく見守りご支援いただくとともに、ご期待いただければ嬉しい限りです。

福知山公立大学 学長　井口 和起











目　次

はじめに ―― 1

第1部　福知山公立大学における地域協働型実践教育

1　地域協働型実践教育とは ―― 3
2　実践教育フィールド一覧 ―― 5

第2部　各ゼミの取り組み報告

1　1回生ゼミ ―― 7
2　2回生ゼミ ―― 10
3　3回生ゼミ ―― 18
4　4回生ゼミ ―― 25

第3部　地域協働型実践教育成果報告会 ―― 31

第4部　学生の主体的な取り組み事例 ―― 32

巻末資料 ―― 33

地域協働型実践教育とは

本学は「市民の大学、地域のための大学、世界とともに歩む大学」という基本理念のもと、「地域（ローカル）に根ざし、世界（グローバル）を視野に活躍する人材」いわゆるグローカリスト※を育成することを目ざしています。このグローカリストの育成にあたり、具体的に身につけさせるべき能力について、本学のカリキュラムポリシーでは「知識」「技能」「遂行能力」という3点に着目し説明しています。それぞれ簡単に説明をすると、社会の基本構造および現代社会が抱えている課題についての「知識」、問題解決につなげるための情報を適切に収集し分析できる「技能」、リーダーシップとパートナーシップを柔軟に使い分け問題の解決に向けた活動ができる「遂行能力」を指します。

※グローバル（global）とローカル（local）を組み合わせたグローカル（glocal）という言葉に、人を意味するイスト（ist）を付けた造語

地域協働型実践教育とは

これらの能力を育成するにあたり、1年次から4年次にそれぞれ以下のような方針で座学と実践的学修がカリキュラムに組み込まれています。

1年次 学びを体験する（体験学修と教養学修の組み合わせおよびフィールドワークの基礎的知識の学修）

2年次 学びを広げる（学修者の関心にそった教養教育の提供、フィールドワークの基礎理論と分析手法の修得、地域の活動体験等を通じて、地域社会の課題の発見、分析、その解決に必要な手法を実践的に学ぶ）

3年次 学びを深める（演習等の学修グループによる特定の組織・団体等の課題を対象とするPBL（project-based learning：課題解決型学習）や地域協働型実践学修を実施する）

4年次 学びをまとめる（グループ単位での一定のまとめを行うとともに、卒業論文を個別にまとめることを重視する）

地域協働型実践教育とは、こうしたカリキュラムの中で、学生が教員だけでなく学外の様々な方々と交流をしながら、地域社会が抱えている課題と実際に向き合う教育活動をさします。実践教育では、その取り組みが中途半端に終わらないようにするために、時間割上でもフィールドワークの時間が十分に確保できるように工夫し、1年次より地域の課題と向き合うゼミナールを開講しています。

この報告書は、各ゼミで2016年度に実施した内容について紹介をするものです。開学1年目ということもあり、試行錯誤を重ねながら実施したという側面も多分にありますが、受け入れ先の皆様のご理解とご協力をいただきながら、学生が地域の課題と向き合う機会を創出してきました。また、この報告書で記載しているゼミの活動以外にも、講義の中で学外の方をゲストスピーカーとしてお招きするなど、地域と大学が連携しながら学生の教育にあたっています。

加えて、本報告書にも紹介しておりますが、課外活動として学生が地域の方々と協働して実施するプロジェクトを企画するなど、正課の授業以外にも地域について学ぶことのできる機会を提供しております。このように、本学の地域協働型実践教育は、講義やゼミの中での実習、また、正課外の活動など、様々な場面で多面的に実施しており、今後も更なる充実を目ざし随時検討していきます。

受け入れ先地域	京都府　福知山市、綾部市、舞鶴市、宮津市、南丹市 兵庫県　豊岡市、朝来市 福井県　おおい町、高浜町 大阪府　堺市など

1. 夜久野地域の「まちづくり」に関する住民意識調査
2. 大江町で地域の魅力と課題を発見する！
3. 学修の基盤と技術の獲得
4. 福知山の地域資源を見つめ直すフィールドワーク
5. 福知山のグッドデザインを探そう！
6. 講義で学んだマーケティングの概念と知識を活かした実践教育
7. 舞鶴の商店街再生から考える地域創生
8. 新しい旅のカタチを求めて〜「農家民宿AtoZ」づくり
9. 福知山市の鳥獣被害の現状と対策
10. 住民主体のまちづくり（景観から考えるまちづくり〜歴史、伝統、文化の継承）
11. 小さな拠点づくりの最前線を学ぶ
12. 京都府の農山村（南丹市）民泊見学と漁村（舞鶴市）での体験宿泊
13. 農商工連携に取り組む事業者へのインタビューを実施
14. 原子力発電所立地自治体の行財政に係る実態調査
15. 福知山市の農業の現状と対策
16. 地域課題のテーマ設定と報告書作成の方法
17. 他のゼミや研究発表の情報を簡潔にまとめて発信する
18. 「竹林と光のプロムナード祭」による観光資源開発
19. ゆらのガーデンで課題解決型プロジェクトを実施
20. 兵庫県豊岡市での教育民泊モニター実施
21. 福知山の魅力と活力の向上を目指して〜パートナーシップによるまちづくり〜
22. 病院見学とデータから見た地域の医療・福祉

丹後
TANGO

北兵庫
KITAHYOGO

福知山
FUKUCHIYAMA

舞鶴
MAIZURU

綾部
AYABE

豊岡町
兵庫県豊岡市での教育民泊モニター実施



伊根町
住民主体のまちづくり（景観から考えるまちづくり〜歴史、伝統、文化の継承）



舞鶴市
京都府の農山村（南丹市）民泊見学と漁村（舞鶴市）での体験宿泊



おおい町
原子力発電所立地自治体の行財政に係る実態調査



舞鶴市
舞鶴の商店街再生から考える地域創生



福知山市
大江町で地域の魅力と課題を発見する！



宮津市
農商工連携に取り組む事業者へのインタビューを実施



綾部市
新しい旅のカタチを求めて〜「農家民宿AtoZ」づくり



福知山市
夜久野地域の「まちづくり」に関する住民意識調査



福知山市
福知山の地域資源を見つめ直すフィールドワーク



福知山市内拡大図





夜久野地域の「まちづくり」に関する住民意識調査

科目名 基礎力演習Ⅰ・Ⅱ－A・B（1回生）

担当者名 遠藤尚秀／江上直樹

授業の目的・趣旨

本授業では、北近畿地域の基本的な情報を学ぶとともに、福知山市夜久野地域へのフィールドワークを通じて社会調査の基礎を学修することを目的としている。具体的には、夜久野みらいまちづくり協議会との連携のもと、「額田のダシまつり」や「夜久野のみらいを語る集い」への参加を通じて地域住民の方々との交流・意見交換を行うとともに、「夜久野町の『まちづくり』に関する住民意識調査」と題した質問紙調査を実施し、住民意識という点における地域課題の整理を行った。



活動概要

①『未来創造　福知山』による福知山市の現状の把握

…福知山市職員をゲストスピーカーとして招き、福知山市が発行する『未来創造　福知山』をもとに、福知山市の現状と課題についての講義を実施した。

②「観光」から見る北近畿地域の市町の比較

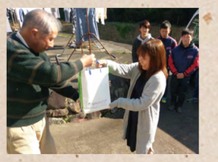
…4グループに分かれてそれぞれの担当地域を設定し、既存統計資料をもとに「観光」という視点から北近畿地域の市町の現状を取りまとめた。また、その情報をもとに福知山市の課題について議論を行った。

③夜久野地域へのフィールドワーク

…夜久野みらいまちづくり協議会と連携し、福知山市夜久野地域を対象としたフィールドワークを実施した。7月には夜久野地域の各主要施設を見学するとともに、同協議会の会員と学生とで地域課題について意見交換を行った。また、10月には「額田のダシまつり」にて展示される「つくりもん」を視察するとともに、ダシ巡行に学生が参加し、地域の伝統文化を通じた住民との交流を図った。11月には質問紙調査のため各自治会長を訪問し、質問紙の配布を依頼した。さらに12月には「夜久野のみらいを語る集いⅡ」に参加し、質問紙調査の結果について中間報告を行うとともに、住民の方々とワールドカフェ形式で町の課題について議論を行った。加えて2月には、希望者を募り「まちづくり振興大会」に参加し、夜久野地域の取り組み事例について改めてレクチャーを受けた。

④夜久野地域の住民意識調査

…夜久野地域が抱える課題の整理を目的に、住民意識を調査する質問紙を作成し、調査を行った。この調査についても、夜久野みらいまちづくり協議会との連携のもと、夜久野地域46自治会のうち11自治会を抽出し、当該自治会内の321世帯に配布した。集計・分析については質問項目ごとに学生の担当を割り当て実施し、主に回答者の年齢と質問への回答結果とでクロス集計表を作成し分析を行った。



学生の感想

江崎公貴
1回生・杏和高等学校卒（愛知県）

ひとえに地域の調査をするといっても、事前に地域について学習するとともに、各関係者との調整、調査先への依頼など色々な準備が必要で、簡単ではないということを実感した。今年学んだ調査の方法を活かして、これからの授業やフィールドワークにも取り組んでいきたい。



大江町で地域の魅力と課題を発見する！

科目名 基礎力演習Ⅰ・Ⅱ－C・D（1回生）

担当者名 齋藤達弘／佐藤充

授業の目的・趣旨

本演習は、地域の現場に赴いて観察し、地域の方々から生の情報を聞き取る手法を学ぶことを目的に、福知山市大江町でのフィールドワークを実施した。前学期には、統計データや資料の収集・分析方法、インタビュー手法を学習した。後学期に入ってからは、さまざまな方々への聞き取りを精力的に行った。



活動概要

この一年、大江町の魅力と課題を発見するために、大江まちづくり協議会や福知山市役所大江支所と連携し、地域で活躍される方々へのインタビュー調査に取り組んだ。ほかにも、大江高校との合同授業や大江元気プロジェクトとのワークショップを実施し、幅広い世代の方々との意見交換を行った。最終成果報告会では、インタビュー調査と統計データに基づく分析結果を発表した。





学生の感想

辻捺乃
1回生・敦賀高等学校卒（福井県）

基礎力演習で、福知山市内と大江地域について少し知ることができた。統計データから地域に関する情報を読み取ったうえで訪れ、地域住民に話を聞くことで、地域の抱えている課題や魅力を体感できた。また、地域の方とのコミュニケーションがスムーズにいくように、インタビュースキルやメモのスキルも身に付けたいと思った。



学修の基盤と技術の獲得

科目名 基礎力演習Ⅰ・ⅡーE（1回生）

担当者名 岡本悦司／佐藤恵

授業の目的・趣旨

大学での初年次教育として、今後の学修活動に必要な基盤づくりを目的とした。また、医療福祉経営学科の学生に対する初期体験学習として、様々な関連施設の見学も計画した。



活動概要

【前学期】目的に沿った資料の調査・収集法と、そのまとめ方を学んだ。また、関連施設として、社会診療報酬支払基金京都支部と錦秀会阪和泉北第二病院を見学した。前学期の学修の成果を、両者に関するレポートと発表会でのプレゼンテーションとしてまとめた。



【後学期】本学学生の「福知山LIFEの満足度調査」を実施し、帰納的研究の作法を学んだ。それとは別に、病床機能報告からそれぞれの出身地別データを抽出・処理することで、データウエアハウスの利用法を学んだ。また、奈良先端科学技術大学院大学を訪問し、自然言語処理など医療情報学分野における最先端の技術について講義を受けた。

「福知山LIFEの満足度調査」では、4班に分かれてそれぞれ課題を決め、質問紙を利用したアンケート調査を実施した。研究計画立案から最終発表までの全工程を、学生が主体的に実行した。各課題と、得られた主な知見は以下のとおりである。

食生活：本学学生は、少ない食費の中でバランスの良い食事を心がけている。これは、厚生労働省が公表している同種のデータとは異なる傾向である。

アルバイト：本学学生は、全国平均に比べアルバイトの就業率・収入ともに高い。時給、人間関係などが、満足度に寄与する因子として挙げられる。

バス利用：本学学生は、福知山市内のバスをほとんど使っていない。これは、バス運行システムについて、広報が足りないためと考えられる。

娯楽施設：市内の娯楽施設に対する本学学生の満足度は高くなく、複合型娯楽施設を要望する学生が多かった。

学生の感想

中村遼
1回生・宇治山田高等学校卒（三重県）

後学期の班活動では、何が課題なのかを考察しながら各自でデータ処理を行い、それを突合・整理することが難しかった。また、リーダーとしてメンバーの役割を決めていくことについても苦労した。本演習で得られた経験を、今後の学修に生かしたい。



福知山の地域資源を見つめ直すフィールドワーク

科目名 キャリア演習ⅠーA（2回生）

担当者名 谷口知弘

授業の目的・趣旨

問題発見から提案に至る地域資源を活用したまちづくりのプロセスを体験することで、地域資源を見つめる視点とフィールドワークの基礎を身につけることを目的とした。

また、ペア科目である「地域資源論」の学びで獲得した地域資源の保全や活用に関わる理論や手法を活用した協働実践を体験することで、実践を充実させるとともに講義で学ぶ理論や手法を実践で活用する行動力と構想力の養成を目指した。

加えて、フューチャーセッション※を実施し、関わった地域や関係者の取り組みの進展につながる支援を試みた。

※フューチャーセッション＝報告や交流会



活動概要

福知山市は市内に都市と農村が近接し多様な地域資源に溢れている。都市部と自然が近く、映画館から5分も歩けば人工物がほとんど目に入らない由良川の大自然が広がる風景に身を置くことができる。このように、福知山市は都会的な暮らしと農村的な暮らし、人工と自然が一つの町に共存し共生するユートピアと見て取ることもできる。そして、それぞれの地域でまちづくりの活動が展開されており、ヨソモンやワカモン、バカモンのキーパーソンが専門性や得意を活かして活躍しているのである。

まずは、これらの豊かな地域資源に学生を引き合わせることが重要だと考えた。そこで、本演習では、福知山市の「ひと」「もの」「こと」などの地域資源に出会い・学び・繋ぐ、地域資源を活用したまちづくりの協働実践を行った。3つのフィールドワークと関係者で未来を語り合うフューチャーセッションを通して、学生はスキルを身につけるに留まらず、地域経営に関わる当事者としての意識を醸成するに至った学生がいたことは大きな成果であった。

3つのフィールドワークとフューチャーセッション

❶福知山市雲原（2016.05.13）、インタビュアー：雲の原っぱ社 吉田美奈子さん、北陵うまいもん市「雲原店」鎌田玲子さん

❷ＮＰＯ法人京都丹波・丹後ネットワーク（2016.06.03）、インタビュアー：森田洋行さん、東家零子さん ❸福知山市三岳（2017.06.24）、インタビュアー：山山アートセンター　イシワタマリさん ●フューチャーセッション（報告・交流会）

福知山の地域資源を見つめ直すフィールドワーク報告・交流会

日時（2016.07.15）

会場　古木と珈琲 モジカ（広小路・まちのば）

未来のステークホルダー（参加者）：吉田美奈子さん（雲の原っぱ社）、森田洋行さん（ＮＰＯ法人京都丹波・丹後ネットワーク）、イシワタマリさん（山山アートセンター）、本学地域経営学部地域経営学科：２回生：于群、鎌田美紀、小出晃子、伍亮、劉艶平、教員（谷口知弘）

学生の感想

「地域活性化するとは具体的にはどういうことなのか。自身に何ができるか考える場を与えてもらった。」

「現場の生の声を聞くことがとっても勉強になった。」



福知山の
グッドデザインを
探そう！

科目名 キャリア演習Ⅱ－A（2回生）

担当者名 塩見直紀

授業の目的・趣旨

問題意識：（1）デザインの重要性がますます高まりゆく時代。地域資源をどう発信していくか。見せ方次第では、まだまだ可能性がある。（2）本授業以外でも感じるのは、本学学生（1～4回生）は、福知山を魅力的に感じていないのではないかということ。4年間で好きなまちに変えるには何がいるのか。

課題解決の1つの視点として、福知山を「デザイン／グッドデザイン」と4つの切り口（新旧大小）＝新しいもの（カフェ、ロゴなど）、古いもの（漆、発酵文化など）、大きなもの（神社、公園など）、小さなもの（チョコレート、お菓子など）から、「魅力の見える化」、AtoZという編集手法でミニブック「福知山グッドデザインAtoZ」を市民協働で制作。

ミニブック制作の3つの目的：（1）学生を含むみんなの「宝もの発見能力」が高まること、（2）成果物が福知山の「新たな地域資源」となること、（3）デザインの観点からまちの「光」を再編集することで福知山を好きな人、ファンが1人でも増えること。



活動概要

福知山のグッドデザインを探すフィールドワーク（AtoZ選定）を以下の通りおこなった。

2016年9月30日（金）＝ホテルロイヤルヒル福知山＆スパ、新町商店街、カフェまいまい堂、広小路通り、ポッポランド、古本とコーヒーモジカ／10月21日（金）＝柳町、福知山市治水記念館、音衛門、ゆらのガーデン、福知山城、洋菓子マウンテン／11月18日（金）＝日本の鬼の交流博物館、元伊勢内宮皇大神社、天岩戸神社、和紙伝承館／12月9日（金）＝古民家カフェしおん、やくの木と漆の館（漆塗り体験）／2017年1月20日（金）＝積雪のため、三和行き中止（大原神社等予定）。大学内でミニブックづくりのための作業（題字、写真選定など）



学生の感想

小出晃子
2回生・東舞鶴高等学校卒（京都府）

これまで意識せずに見ていたものが、こちらが一歩近づいて見ることによって、デザインの方も自分に近づいてきてくれる。デザインがなければ、味気なくモノクロの世界だが、デザインがあることにより、街にも人にもうるおいが現れ、元気の源となる。



講義で学んだ
マーケティングの概念と
知識を活かした実践教育

科目名 キャリア演習Ⅰ－B（2回生）

担当者名 加藤好雄

授業の目的・趣旨

京都府北部地域のさまざまな地域活動を対象として、その実態を知り、その魅力や課題を見出すこと、またその魅力や課題がなぜそこにあるのかをさまざまな方法を使って理解することを学ぶ。



活動概要

【活動概要】

本授業では、講義で学んだマーケティングの知識を活かして企業の調査を行う。また、実際に番組の構成を考えて出演することでラジオ番組を体感する。

【対象とする企業等】

京都府、福知山市、綾部市、舞鶴市、兵庫県の5つのラジオ局

【実施項目】

①調査…5つのラジオ局の概要と特徴を知る。

②特徴を生かした番組作成・出演…FM「いかる」（綾部市にあるコミュニティラジオ）

【番組内容】

4名の学生の出身地（宮城県多賀城市、熊本県熊本市、島根県出雲市、京都府京丹後市）の地域の説明や地域特性の違いについて議論をしたり、東日本大震災・熊本地震を体感した感想やボランティア活動の報告等を行った。また、大学が公立化したことの影響や今後（就職・資格・学び・趣味等）についてと話の内容は広がっていった。

学生の様子

ラジオ番組を普段は聴かないことが多く、初めて聴く学生は興味を持っていないようだった。ただ、普段から車での移動中に聴いている学生は調査等も積極的で興味の違いが学修の効果に影響していることが明らかになった。また、番組を制作し出演した後は、ほとんどの学生がラジオに興味を持つようになった。



舞鶴の商店街再生から考える地域創生

科目名 キャリア演習Ⅱ－B（2回生）

担当者名 杉岡秀紀

授業の目的・趣旨

京都府が進める「地域創生型商店街」に舞鶴が選定されている。そこで本ゼミでは、舞鶴の選定団体である、共同組合東舞鶴商店街連盟、特定非営利活動法人MCAをパートナーに調査研究＆実践活動を進めた。



活動概要

・9月30日：自己紹介、ガイダンス、座学「フィールドワークとは」、ワークショップ「思わず行きたくなる商店街とは？」、各自調査（①舞鶴市の概要、②京都府商店街創生センター、③ユネスコの記憶遺産（引揚げ）、④日本遺産、⑤赤れんが、⑥東舞鶴商店街、⑦特定非営利活動法人MCA）
・10月21日：調査発表、福知山商店街視察（新町商店街・正面通商店街・広小路商店街・アオイ３丁目商店街・内記新町商店街・ゆらのガーデン・福知山イオン）・共有、質問票の作成
・11月11日：舞鶴市観光商業課（竹山様）、共同組合東舞鶴商店街連盟（土田様）、特定非営利活動法人MCA（塩見様、松井様）ヒアリング調査、商店街×地方創生×大学フォーラム（山田崇・塩尻市職員）への参加・設営補助
・12月9日：フィールドワーク（日本遺産聖地巡礼33箇所巡礼事業協力店訪問）
・1月20日：ふりかえり、ワークショップ「日本遺産聖地巡礼33箇所巡礼事業を成功させるには何が必要か？」、提言書作成

学生の感想 姜函坪 2回生
各イベントに参加する過程で、京都府北部地域の様々な魅力を知り、現地活動の情報の収集方法や調査の実施、結果の分析などを理解することが出来た。今後も地域に関することを学び続けたい。



新しい旅のカタチを求めて～「農家民宿AtoZ」づくり

科目名 キャリア演習Ⅰ－C（2回生）

担当者名 塩見直紀

授業の目的・趣旨

問題意識：（1）京都府のなかで特に観光が弱いとされる中丹地域（福知山、舞鶴、綾部）。（2）中丹地域ではどんな旅をデザインし、提案すればいいのか。課題解決の1つの視点として、若い世代の旅人を国内外から集める可能性をもつ「農家民宿」と「WWOOF（ウーフ＝World Wide Opportunities on Organic Farms＝有機農場で働きたい世界中の人が、お金を介さず、労働力と食事、宿、知恵を交換しながら、旅ができるしくみ）」をキーワードに、若い世代の価値観やライフスタイルの変化、中丹地域がめざすべき新しい旅、観光の在り方の提言を考える。福知山と綾部の農家民宿の経営者を訪ね、インタビュー。可能性を見える化、AtoZという編集手法でミニブック「農家民宿AtoZ」を市民協働で制作。ミニブック制作の3つの目的：（1）学生の「可能性発見能力」が高まること、（2）デザイン力をもつ成果物が生まれることで、学生の自信となること。（3）成果物が地域の魅力発信のためのツールになること、観光の「新たな地域資源」となること。それによってファンが1人でも増えたり、旅する人が増えること。



活動概要

農家民宿インタビュー、ミニブック制作のスケジュール2016年5月20日（金）＝農家民宿「雲の原っぱ社」（福知山市、吉田美奈子さん経営）、京都府中丹広域振興局地域づくり推進室・浜中清司さんによる府がすすめる農家民宿の話（府職員出前語らい・専門職員派遣制度活用）／6月3日（金）＝農家民宿「ふるま家」（福知山市、沢田さやかさん経営）／7月1日（金）＝農家民宿「イワンの里」（綾部市、秋元秀夫さん経営）、「水田家の食卓」（同・水田裕之さん）／7月15日（金）＝農家民宿「里山ゲストハウス　クチュール」（綾部市、工忠照幸さん経営）／7月29日（金）＝学内にて、まとめ



学生の感想 川尻一平 2回生・創成館高等学校卒（長崎県）
全世界で何十億人と住むこの世の中で、人と人とが出会う確率は何億分の１だ。人と出会うことはそれだけで奇跡。全世界でたくさん宿があるなかで、この日本の農家民宿を選び、そこの家族と出会い、語りあう。それは大変すばらしいことだ。



福知山市の鳥獣被害の現状と対策

科目名 キャリア演習Ⅱ－C（2回生）

担当者名 矢口芳生

授業の目的・趣旨

地域の農業・農村が抱える様々な問題を把握し、問題の改善・解決に何が必要なのか、地域ではだれがどのように対応しているのか等について、現場にて具体的に体験しながら地域の農業・農村の状況を学ぶ。また、このような実践型演習をとおして研究課題を発見し、専門研究・卒業研究の課題につなげ、卒業論文にまとめる。



活動概要

2016年度後学期は、「福知山市の鳥獣被害の現状と対策」というテーマをメインに3.5回、また人間生活の基本である「衣食住」のひとつである「衣」をテーマに1.5回、計5回の実践型演習を実施した。現場での講話の概要、気づき、議論の概要と感想、提案等に関するレポート（1,200字程度）を毎回提出してもらった。各回の概要は次のとおり。

1．福知山農業の現状と課題―とくに鳥獣害問題とその方向性について
市の担当者から講話、その後討論を行った。

2．鳥獣害対策とジビエ利用―「（有）田舎暮らし」の取り組み
社長さんの講話、その後討論、鹿捕獲の現場を見学した。ジビエ試食（昼食）。

3．鳥獣被害の現状と対策
担当者の矢口が講義。図書館にて、出身地の「鳥獣被害の現状と対策」について文献調査し、レポートを作成。後日、さらに調査してレポートを完成させ提出。

4．出身地の「鳥獣被害の現状と対策」（提出レポート）に基づく発表会と討論
午後には「丹波生活衣館」にて衣服に関する講話と織りの体験。

5．綾部市にある「グンゼ博物苑」・「グンゼ記念館」・「農産物直売所」の見学
かつて「蚕都」といわれた綾部市やグンゼの蚕糸業関連施設等を見学した。

学生の感想
川尻一平
2回生・創成館高等学校卒（長崎県）
銃で鹿を捕獲する現場を生でみた。鹿肉の弁当に大切な命をいただいたと思った。



住民主体のまちづくり

（景観から考えるまちづくり～
歴史、伝統、文化の継承）

科目名 キャリア演習Ⅰ－D（2回生）

担当者名 福島貞道

授業の目的・趣旨

講義（地方行政）とも関連させた「住民主体のまちづくり」をテーマに、実際にパートナーシップによる住民主体のまちづくりに取り組んでいる地域を訪問させて頂き、その取組の実態を、関係者の皆さんの生の声と現地の状況に直に触れることによって、まちづくりにおいて何が大切で、どのような手法があるのか等についての基本を学び、自ら考え、提案できる能力を養うことを目的とした。



活動概要

溝尻地区の自然と舟屋という風景を活かしたまちづくりの在り方の調査、研究

‖調査手法‖

重要文化的景観地区に指定されている溝尻地区を訪問し、まちづくり協議会の方々や宮津市教育委員会の方から当該地区の歴史、課題、まちづくりの方針等について学び、その後に当該地域の町並み、舟屋の風景等を見学させて頂くこととした。



‖具体的行動‖

福知山市から天橋立を経由し丹海バスで溝尻を訪問した。

真夏日の暑い中、またお忙しい中を、まちづくり協議会の委員の方々や教育委員会の方が公民館で待っていて下さり、早速、溝尻地区の地理特性や歴史、文化、現在の状況、将来的展望等について懇切丁寧に説明して頂いた。

今回のような訪問調査を初めて経験する学生からの質問にも分かり易い言葉で答えて頂き、その後、溝尻地区の町並みや内海（阿蘇海）に向かって建ち並ぶ舟屋に案内して頂いたことで、学生も先の説明と現実の風景とを重ね合わせて考えることができたようである。

今回の授業は前学期のみということであり、この調査の結果を各自報告書としてまとめることで終了とした。

学生の感想
小谷祐史
2回生・八鹿高等学校卒（兵庫県）
今回のキャリア演習で私は、地域再生には住民がどうしたいのかということが大切であるということや、活動するためにはその場所にどんな権利や制限、ルールがあるのかということを十分調べる必要があるということを学んだ。学生が調査に来るということで、忙しい中資料の準備をして頂き、質問に的確に回答して下さり、とてもありがたいと感じた。住民の方々が気軽に話し掛けて下さり、緊張をほぐすことができた。



小さな拠点づくりの最前線を学ぶ

科目名 キャリア演習Ⅱ－D（2回生）

担当者名 杉岡秀紀

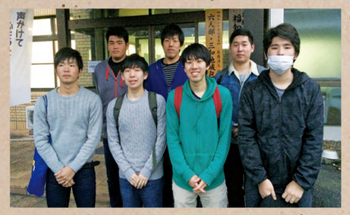
授業の目的・趣旨

現在全国で「小さな拠点」「小規模多機能自治」による域内分権、地域コミュニティづくりが進んでいる。そこで、本ゼミでは「三和地域協議会」をパートナーに調査研究＆実践活動を進めた。



活動概要

・10月7日：自己紹介、ガイダンス、座学（小規模多機能自治とは何か）、福知山市行革委員会傍聴、調査（①福知山市の概要、②三和地域協議会、③夜久野みらいまちづくり協議会、④大江まちづくり住民協議会、⑤朝来市の小規模多機能自治について、⑥雲南市の小規模多機能自治について、⑦IIHOEについて）



・11月4日：調査発表、質問票（三和地域協議会、朝来市）の作成
・11月25日：三和地域協議会事務局長（岡部様）による「三和町及び三和地域協議会」についてのミニ講義、意見交換、ヒアリング調査。
・12月16日：朝来市市長公室総合政策課市民協働係（中嶋様）による「朝来市及び朝来市の小規模多機能自治」についてのミニ講義、意見交換、ヒアリング調査。
・1月27日：ワークショップ「福知山市内では学生が連携してどのような小規模多機能自治が考えられるか？」、提言書作成

学生の感想

藍畑祐介
2回生・田辺高等学校卒（和歌山県）

この実践教育は、事前にデスクワークとして小規模多機能自治について学んだことをそれだけで終わらせるのではなく、学んだ実際の取り組みを行っている地域自治協議会の方々から直接話を伺い、さらに質問を交えるなど他の授業では学べない深いところまで学ぶことができ、知識がしっかりと身についた。



農商工連携に取り組む事業者へのインタビューを実施

科目名 キャリア探究Ⅱ－A（3回生）

担当者名 佐藤充

授業の目的・趣旨

本演習は、北近畿地域を対象にして、地域資源を活用した商品の実態を把握し、各商品の取り組みについて明らかにすることを目的に、関係者へのインタビュー調査を実施した。京都府と兵庫県の資料を収集・分析した上で、農商工連携に取り組む事業者と地域資源を活用した商品を取り扱う商業施設の2か所を訪問した。



活動概要

後学期において、農商工連携に取り組む事業者や地域資源を活用した商品を取り扱う商業施設へのインタビュー調査を実施した。訪問先は、京都府と兵庫県の資料から、ハクレイ酒造株式会社（宮津市）とJR西日本福知山支社を選定し、それぞれの関係者から取り組み内容を聞き取るとともに、現地での視察も行った。



学生の感想

大谷翔太
3回生・啓新高等学校卒（福井県）

このゼミでは、農商工連携について調査を行った。実際に事業者や商業施設からお話を伺い、事業者では他の事業者との信頼関係が大切であることが、商業施設では地域を活性化させるために商品のPRが重要であることがそれぞれ分かった。



原子力発電所立地自治体の行財政に係る実態調査

科目名 キャリア探究Ⅰ・Ⅱ－B（3回生）

担当者名 三好ゆう（キャリア探究Ⅰ－B）
福島貞道（キャリア探究Ⅱ－B）

授業の目的・趣旨

本クラスにおける授業目的は、原子力発電所を有する自治体の行財政における課題とその解決に向けた具体的政策について、調査研究することにあった。具体的には、財政構造を分析し予算配分を確認したうえで、ヒアリングおよび町並み調査等を通じて比較分析することで、原発立地自治体の財政と政策等を総合的に把握し、普遍的課題を抽出することを基本目的とした。

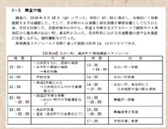
〈調査対象とした自治体〉
調査対象は、福井県おおい町と高浜町とした。その理由は、①大学がある福知山市が原発立地周辺自治体となると考えられること、②福井県の原発保有数は日本一であり、特徴的な地域であること、③原発関連の交付金の存在を知ってはいたものの、その規模や使途について詳しく調べたいと思ったこと、の3点にある。

活動概要

＜授業の位置づけ＞
本クラスは、前学期開講の「キャリア探究Ⅰ」と後学期開講の「キャリア探究Ⅱ」を通年の授業と位置づけ、ペア科目とされた講義科目「地方財政学」と「地方行財政」で学んだ知識を土台に、学生5名による共同研究として取り組んだ。

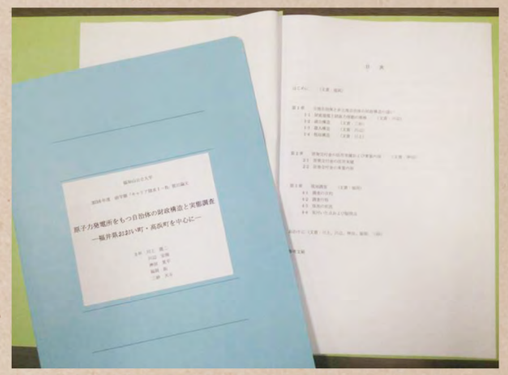
＜前学期「キャリア探究Ⅰ」での到達点＞
調査対象とした原発立地自治体である福井県おおい町と高浜町の特性を把握するために、まずは両町について、非立地自治体の京都府綾部市と比較しつつ、財政的特徴を明らかにした。使用した主な資料は、総務省「決算カード」、㈶福井原子力センター『福井県の原子力』、経産省エネルギー庁『電源三法活用事業例集』のほか、各町のホームページ内における財政関係資料である。
比較分析の結果、原発立地自治体の財政的特徴として3点、電源三法交付金の使途については3点の共通点があることが分かった。
こうした予備調査を基に、現地調査を2回行った。両町へはメンバー全員が初訪問であったため、まずは町全体を車で移動しながら概観し、町の雰囲気を感じ取ることを心掛けた。京都府綾部市の上林地区を通過して福井県おおい町に入るルートを取ったことで、立地自治体の財政力の高さと、それが顕著に表れた町の姿を目で確認することができた。
前学期に行った財政分析と町並み調査は、共同論文「原子力発電所をもつ自治体の財政構造と実態調査－福井県おおい町・高浜町を中心に－」としてまとめた。

＜共同論文より、以下、抜粋文＞
福島原発事故、各立地自治体の原発の多くは稼働を停止している。各立地自治体のほとんどはその原発によって財政面の多くを占めている。今後自治体の考えるべき課題は、原発の収益に頼らない新たな産業開拓と、必要性のない経費の削減など、改めて財政構造を見直してもらいたいと感じた。
今後の課題として考えられることは、①文献調査（先行研究の整理）を行うこと、②多くの時間を費やしてデータ処理した財政分析結果と、現地調査結果との擦り合わせをすること、③メンバー間で十分な議論を行い、積極的な意見交換をすること、の3点である。









＜後学期「キャリア探究Ⅱ」での到達点＞
前学期に行った予備調査の結果を基に、本調査として両町役場を訪問して行ったヒアリングを通じて、自治体運営に係る具体的な財政内容を固める根拠について学んだ。
各担当者からの詳細な説明や質疑に対する懇切丁寧な応答により、初めてのヒアリング経験ではあったものの、自治体経営の実際と苦労等の一端を知ることができたことは極めて有意義であったといえる。加えて、両町から貴重な資料を数多く提供していただけたため、両町のまちづくり戦略や各種行政施策についての補足調査も行うことができた。
両町の政策にはそれぞれ特徴があるが、共通するのは人口減少問題である。両町の行政政策の根底には町の存続をかけた定住人口の確保による活性化があり、これに係る様々な課題を有していることが分かった。
前後学期を通じての学修成果は、「原子力発電所を有する都市の行財政に係る実情調査－おおい町と高浜町の実情と将来構想－」というタイトルで論文として仕上げた。

＜共同論文より、以下、抜粋文＞
両町のご協力も頂くことができたことから両町を訪問し、担当者の方の生の声を聞くことができた。それぞれの担当者の方々の詳細な説明や未熟な質疑に対する懇切丁寧な応答により、初めてのヒアリング及び現地調査の経験ではあったが、行政のほんの一端であると思うが実際の現場における自治体経営の実際と苦労等を知ることができた。
今回聞かせていただいた様々な取り組みによって、今後両町がどのような発展を遂げていくか注目していきたい。また、機会があれば、改めて調査してみたいと思わせる自治体であった。



以上のことから、本クラスでは、先に整理したデータと実際の具体的行政施策との関係を理解し、前後学期を通して、テーマとした原子力発電所を有する自治体における行財政の全体像を把握することができたといえる。



学生の感想
川辺安海
3回生・京都暁星高等学校卒（京都府）

1年を通じてこの授業で学んだことは、自治体の財政構造と政策等である。「原発保有自治体」という特殊な自治体が対象であったため、学んでいくうえで難しいと感じることが多かった、一方で、自分の住むまちにはない特徴があったため、大変興味深く学ぶことができた。今回の授業時間内では、対象自治体の行財政のすべてを把握することはできなかったが、確実に次の学びに繋がるものがあった。



京都府の農山村（南丹市）民泊見学と漁村（舞鶴市）での体験宿泊

科目名 キャリア探究Ⅰ－A，Ⅱ－C（3回生）

担当者名 中尾誠二

授業の目的・趣旨

京都府中丹広域振興局管内の福知山市・綾部市・舞鶴市は丹後広域振興局管内の宮津市・京丹後市・伊根町・与謝野町とともに「海の京都DMO」の構成地域となっている。また、福知山市・綾部市は南丹広域振興局管内の亀岡市・南丹市・京丹波町とともに「森の京都」エリアにもなっている。

南丹管内では一般社団法人「京都丹波・食と森の交流協議会」が窓口となって教育民泊の受入を推進しており、森の京都エリアも受入地区として体制整備が進められつつある。そこで今回3回生5人と一緒に「食森協議会」の民泊受入を見学し、実態把握に努めた。また、少人数分宿ではないものの中規模漁家民宿で漁業体験を実施してきた舞鶴市の野原地区でも同じ学生に体験宿泊を実施し、現地調査の手法を学んだ。

活動概要

11/11、南丹市で農山村「教育民泊」受入の実地調査
（京都学園中学校の入村式等を見学）
1/27-28、舞鶴市「体験型教育旅行」受入地の野原地区で体験宿泊
（干物づくり体験・漁家民宿泊等を通して地域の現状と課題について聞取調査を実施）



学生の様子 4回生と同じく当初あまり関心を示さなかった学生の態度が宿泊体験を通して大きく変わった。



福知山市の農業の現状と対策

科目名 キャリア探究Ⅰ－C（3回生）

担当者名 矢口芳生

授業の目的・趣旨

地域の農業・農村が抱える様々な問題を把握し、問題の改善・解決に何が必要なのか、地域ではだれがどのように対応しているのか等について、現場にて具体的に体験しながら地域の農業と農村の状況を学ぶ。また、このような実践型演習をとおして研究課題を発見し、専門研究・卒業研究の課題につなげ、卒業論文にまとめる。



活動概要

2016年度前学期は、「福知山市の農業の現状と対策」というテーマをメインに3.5回、また人間生活の基本である「衣食住」のひとつである「衣」をテーマに0.5回、計4回の実践型演習を実施した。現場での講話の概要、気づき、議論の概要と感想、提案等に関するレポート（1,600字程度）を毎回提出してもらった。各回の概要は次のとおり。

1．福知山農業の現状と課題―とくに「青年就農給付金制度」について
午前、市の担当者から講話、その後討論を行った。
午後、「丹波生活衣館」にて衣服に関する講話と織りの体験。

2．夜久野・「農匠の郷」の取り組み
「やくの高原市」の担当者から、設立経緯と運営状況について講話。
その後討論、「農匠の郷」の施設の見学。

3．農業生産法人「（株）味歩里」の取り組み
経営状況と今後の取り組みについて、社長さんの講話。
施設見学、ネギの調製作業の体験。

4．「（有）田舎暮らし」の取り組み
鹿・猪の解体とジビエ利用について、社長さんの講話。その後討論

学生の感想 松本尚也（3回生・大阪体育大学浪商高等学校卒（大阪府））
農業の担い手を確保するのに「青年就農給付金制度」があることを初めて知った。



地域課題の
テーマ設定と報告書
作成の方法

科目名 キャリア探究Ⅰ－D（3回生）

担当者名 江上直樹

授業の目的・趣旨

本授業では、地域の問題に関する文献資料や統計資料の収集の方法を学ぶとともに、先行研究等を参考にしながら、課題設定の仕方と報告書・レポートの作成方法を修得し、4年次の卒業研究のために必要な基礎的なスキルを身につけることを目的とする。具体的には、聞蔵やCiNii等のデータベースを用いた新聞記事検索・論文検索の方法を学び、そこから収集した情報から自身の関心のあるテーマを設定し、一般的な論文の形式に則った文章の書き方について学習する。



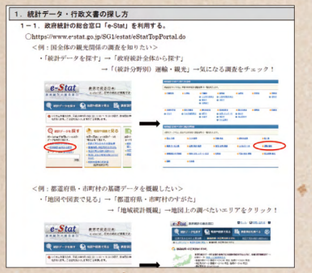
活動概要

①地域課題への取り組み事例の紹介
…中国における野菜用洗濯機の事例や、ガーナにおける公衆トイレの衛生環境の改善の事例など、国内外の地域課題への取り組み事例を紹介し、地域社会における問題が具体的にどのように課題として設定され取り組まれているのか把握する時間を設けた。

②データベースを活用した資料・データの収集方法の修得
…「CiNii」「聞蔵」等を用いた論文・新聞記事検索の方法や、「e-Stat」等を用いた統計データの収集方法について、コンピュータを用いた演習を行い、資料・データ収集のスキルの修得を図った。

③先行研究を参考とした、報告書・レポートの構成の把握
…地域課題に関する論文や報告書等の先行研究を参考に、報告書やレポートをどのような構成で作成する必要があるのかの確認を行った。

④取組テーマの設定とレポートの作成
…学生それぞれで資料収集を行い、その過程の中で自分が関心のあるテーマを設定し、レポート作成に取り組んだ。



学生の感想
西田幸太郎
3回生・専修大学玉名高等学校卒（熊本県）
この授業で自分が何に関心があるのかということを改めて考えたが、自分の頭の中だけで考えるだけではなかなか思い浮かばず、色々と資料を調べることの大切さがわかった。今後も、きちんと資料を調べたうえで、自分の意見を考えるということを大切にしていければと思う。



他のゼミや
研究発表の情報を
簡潔にまとめて発信する

科目名 キャリア探究Ⅱ－D（3回生）

担当者名 加藤好雄

授業の目的・趣旨

京都府北部地域のさまざまな地域活動を対象として、その実態を知り、その魅力や課題を見出すこと、またその魅力や課題がなぜそこにあるのかをさまざまな方法を使って理解することを学ぶ。
本授業では、主に情報収集と情報発信について学ぶことを目的とする。



活動概要

本授業では、情報収集と情報発信について学ぶことを目的としつつも、その前段階の「情報をまとめる」ことに焦点を当てている。活動として行ったのは、主に以下の2点である。

①他のゼミの実践教育の様子を取材し、記事にまとめて発信する。
②日本観光学会全国大会での興味を持った発表をレポートにまとめる。





学生の感想
小菅駿平
3回生・佐渡高等学校卒（新潟県）
私は他の実践教育を記事にするという活動で、その様子を記事にして伝えるということの難しさを実感した。言葉で様子を表現することや様子を伝えるための写真撮影など、見てもらうことを考えた時にすごく考えさせられるものだった。今回の活動は今後にも活かせる良いものだった。



「竹林と光のプロムナード祭」による観光資源開発

科目名 キャリア設計Ⅰ・ⅡーA（4回生）

担当者名 平野真

授業の目的・趣旨

地域の伝統工芸である丹後二俣和紙を使って、地元の小中学生とともに灯籠を製作し、由良川の川辺に放置されていた自然竹林である蛇ヶ端藪（通称明智藪）の周辺に飾って、「竹林と光のプロムナード祭」というイベントを開催する。この活動を通じて、活用されていなかった様々な資源を有効な観光資源（経営資源）へと転化し、子供達の郷土意識の醸成につなげ、市民や各種団体との協働による大学生の実践能力を養うことを目的とした。



活動概要

そもそも福知山へはあまり観光客がこないという話がきっかけだった。なぜ福知山は人を惹きつけられないのかという素朴な問いを大切にし、みんなが素晴らしいという観光客の多い嵐山に行き、嵐山の魅力を発見してみようという話になった。結果、嵐山は確かにその竹林やお寺も素晴らしいが、町中に人を引き付けるための工夫があった。例えばゴミ箱一つとっても、綺麗な茶色の木で周りを包み屋根までつけているといった発見があった。つまり、人が集まる観光地やよく売れる商品というのは、魅力を発揮するような「見せ方」を工夫しており、魅力は人が作っているのだと分かった。

そこで福知山にも、埋もれている魅力がたくさんあり、見せ方次第で魅力が蘇るのではないか、ということで、伝統工芸の和紙や、自然竹林の存在に気がついていった。大人だけでなく、将来の地域を担う小中学生も、地元のことを本当はよく知らない、という現実にも気が付いた。そこで、子供達と一緒に地元の和紙を使った灯籠作りを行い、地元の竹林に飾るイベントをすることにした。この計画に、環境会議という自然保護の市民団体や、青年会議所という若手実業家の集まりや、行政の人たちの協力もあり、こうした様々な人たちと一緒に事業を成し遂げる楽しさも味わった。



学生の感想

平田一慧
4回生・福知山成美高等学校卒（京都府）

田舎にも人と人の繋がりであったり、自然などたくさんいいことはあると思う。私自身も今回グループワークをしてみて感じたことを同世代に少しでも伝え自分が生まれ育った町をよりよい町にしたいと感じた。



ゆらのガーデンで課題解決型プロジェクトを実施

科目名 キャリア設計Ⅰ・ⅡーB（4回生）

担当者名 佐藤充

授業の目的・趣旨

本演習は、地域課題の解決策を検討する手法を習得するために、福知山市の賑わい創出拠点である「ゆらのガーデン」をフィールド先にして、課題解決型のプロジェクトを展開した。単に現状を分析するだけではなく、課題の解決に向けた取り組みを実施するものとした。



活動概要

前学期では、ゆらのガーデンの出店者協議会の方々へのヒアリング調査や現地視察を重ねて、ゆらのガーデンの現状を分析した。後学期では、現状分析の考察を踏まえて、ゆらのガーデンの課題となっていた若年層への認知度アップに向けて、ゆらのガーデンの店舗とコラボした屋台を大学祭で出店した。



学生の感想

馬場大河
4回生・豊国学園高等学校卒（福岡県）

一年間を通してゼミで学んだことは、大学生活の中で1番価値のあるものになったと思う。ゆらのガーデンの集客のために、皆でアイディアを出し合うことは社会に出てもとても役に立つことだと感じた。この経験を活かし社会に貢献していきたい。



兵庫県豊岡市での教育民泊モニター実施

科目名 キャリア設計Ⅰ、Ⅱ－C（4回生）

担当者名 中尾誠二

授業の目的・趣旨

福知山の北西部に隣接する「兵庫県豊岡市」は、2005年4月1日に城崎・竹野・日高・出石・但東5町と旧豊岡市が対等合併した人口8万2250人（2015国勢調査）の自治体である。温泉街・海水浴場・スキー場・城下町といった典型的な観光資源の乏しい旧但東町地域では、地域振興策の一環として教育民泊（農家民宿等での少人数分宿型教育旅行）受入を2009年から推進している。

今年度は但東町民泊の受入見学と学生２人のモニター宿泊を行うことで、学生にとっては現地での聞き取り調査等を体験すること、受入地域にとっては大学生とコミュニケーションする上での課題発見することをそれぞれ目的とした。





活動概要

6/3、神戸市立須佐野中学２年生１３３名が但東町内で民泊する様子を見学
7/28、豊岡市但東振興局で中間報告
12/16-17、但東町内の農家民宿でモニター宿泊

学生の様子 当初は農村活性化等に関心を示さず、やや冷めた態度を示していた学生も、実際に宿泊を体験し、受入れ家庭の人と接することで「素朴な田舎の人情」を理解できたようだ。それは、モニター後の学生2人の表情に表れていた。



福知山の魅力と活力の向上を目指して

～パートナーシップによるまちづくり～

科目名 キャリア設計Ⅰ－D（4回生）

担当者名 福島貞道

授業の目的・趣旨

学生にとっては４年間を過ごした福知山市には愛着と思い入れがある。卒業に当たって、感謝の気持ちを込めて“何か福知山市のためになることを遺していければ”、という学生の想いを踏まえ、この授業は、通年の科目構成ではないが前学期・後学期を通してまちづくりに関わる関係者へのヒアリング、現地調査及びその分析等を行い福知山市の魅力と活力の向上に向けての具体的な提案をまとめることとした。



活動概要

観光都市として発展するための資源及びその活用方法等についての調査、研究。

‖調査手法‖　福知山市の概要、まちづくりに関する基本方針等を学んだ後、福知山市の観光資源でありランドマークである福知山城を出発点として、市街地を経由して由良川までの間にどのような観光ルートが形成できるか、という観点からまち歩きを行うこととした。



‖具体的行動‖　福知山市を訪問し、都市計画部門の方から福知山市の地理的特性、歴史、まちづくりの経緯、近年の状況等福知山市の概況を学んだ後、雨に叩かれながらのまち歩きに出た。まち歩きの出発点とした福知山城を訪問し、ここでも近年の来場者の状況等についての詳細な情報を得た。

市街地内のルートとして商店街通を選んだが、個々の建築物には目を引くものがあるものの商店街としては思いのほか寂しく、活性化に向けての手法を頭に描きながら広小路まで通り抜けた。

学生も今回のような目で町を観たことがなかったようで、初めて発見することも多かったようであった。

前学期は、ここまでの結果を各自報告書としてまとめることで終了とした。

学生の感想 藤本和輝 4回生・関西中央高等学校卒（奈良県）

今回のキャリア設計で学んだことで、福知山市がどんな地域かが分かった。もっと福知山市のことをＰＲし、知ってもらうことが大切でそれが地域活性化への取組にもつながると思う。これからも何らかの形で福知山市と関わっていきたいと思った。



病院見学とデータから見た地域の医療・福祉

科目名 キャリア演習Ⅰ・Ⅱ－E、キャリア探究Ⅰ・Ⅱ－E、キャリア設計Ⅰ・Ⅱ－E

担当者名 芦田信之（キャリア演習Ⅰ・Ⅱ－E）
星雅丈　（キャリア探究Ⅰ・Ⅱ－E、キャリア設計Ⅰ・Ⅱ－E）

授業の目的・趣旨

医療福祉経営学科は、地域社会を支える医療・福祉施設の経営に貢献する「事務職」の育成を目的としている。当学科の学生は、入学当初より医療・福祉の専門科目を座学で学ぶ。3年次には全員が5日間の病院実習に赴き、座学で得た知識に現場の体験を加えて実感が伴う形で医療・福祉を理解する。医療・福祉の事務職として、施設全体を俯瞰的に眺め、組織をマネジメントする役割を担うために、学生は幅広い体験を通じて医療・福祉に対する感性を養う必要がある。そこで今年度の当ゼミにおける地域協働型実践教育では、アーリー・エクスポージャー（Early Exposure：早期体験学習）を兼ねた病院見学を行った。また、一般に公表されているデータを用いて北近畿地域における医療の現況を探索的に分析し、その結果を学生が学会において発表した。

活動概要

1. 病院見学

今年度、当ゼミが見学を行った医療・福祉施設は、大阪府堺市の医療法人錦秀会 阪和第二泉北病院（以下、泉北病院）である。7月22日、2・3・4回生全員（14名）に教員3名を加えた計17名が参加した。泉北病院は、総病床数969床のうち、高齢患者や慢性期の患者が入院する「療養型病棟」が734床、重度の肢体不自由者や重度障害者に長期入院治療を行う「障害者施設等一般病棟」が120床、「一般病棟」が39床、癌などの末期患者に痛みの除去などのケアを行う「緩和ケア病棟」が21床の構成である。泉北病院は、多くの患者が長期に渡る治療を必要としており、外来患者が少ないという、学生が実習などで見た医療、大学で学んできた医療とは全く異質である。学生の感想にあるが、彼らの多くは非常に新鮮な印象を持ったようである。なお、泉北病院の患者の主な特徴は、救急医療から長期療養への移行中、早期の治癒が困難、老人ホーム等で疾患や症状が悪化、社会復帰にリハビリが必要など、一般病院での受け入れが難しい患者が多い。大阪市南部と堺市地域において、特に老人ホーム等で疾患や症状が悪化した患者の受け入れには、多大な貢献をしている病院である。病院見学では、事務職員の業務の場や業務内容を中心に、治療の現場から少し離れたバックヤードにおける事務職員の動きについて説明がなされた。特に薬局など医療専門職間の情報や物品の伝達が病院情報システムと事務職員の働きによって行われている点が強調され、病院事務職員は広く医療を知り、多くの専門職者と関わる覚悟が必要であるとご教示いただいた。

2. 北近畿地域における医療の現状や情報提供に関する研究発表

当ゼミでは、10月11日～14日に東京国際フォーラムにて開催された第42回日本診療情報管理学会学術大会において4演題の口演発表を行った。テーマは、北近畿地域における医療の現状分析と、地域住民に対する大学からの医療・福祉情報の発信を目的とした研究である。各演題名（担当者）については、①DPC対象病院による北近畿地域における医療機能分化について（4回生：森本彩香、3回生：小西春奈・真崎健也）、②北近畿地域におけるDPC対象病院の入退院調整と病病連携に関する一考察（4回生：朝倉竜太・小西敦貴・竹内絢花）、③近畿圏内におけるDPCデータから見た結核の現状に関する考察（3回生：磯橋智久、大田剣）、④診療情報管理士テキストの用語抽出による専門用語集作成の試み（4回生：原口敦士、島村恭平、古澤聖、前川智仁）であった。なお、この学術大会は国際学会The 18th IFHIMA International Congressとの共催であり、外国人が多く出席していた。学会に参加した当学科2・3・4回生13名は、懇親会において羽根つきなど日本の伝統的な「遊び」を外国人客に体験させるボランティア活動を行った。

3. 福知山3地区におけるアンケート調査

2回目のキャリア演習においては、成美大学短期大学部の野間研究室と共同で福知山の3地区（雲原・かしの木台・堀）にて高齢者の食育アンケート調査を実施した。

4. 次年度に向けて

学生からは、医療・福祉施設への見学機会をもっと設けて欲しかったとの意見が寄せられた。感想に表れている通り、学生は座学や実習によって得た医療・福祉の知識による「軸」を以て医療・福祉施設を比較しつつ見学している。可能な限り、施設見学の機会を与え社会に送り出すことが、当学科教員の務めである。次年度以降、地域の医療・福祉施設との協定締結など関係性の強化に努めたい。また、その上で医療福祉施設の経営に資するデータの分析などを当学科が請け負うことができれば、真の地域協働による実践型教育が実現するものと考える。なお、ある学生が、学会発表の直後、「医療福祉情報を提供するWebサイトを大学で開設して、来年度の学会で発表したい。」と目を輝かせていた。大学を離れ、アカデミックな場を経験した学生が、研究活動に臨む意識を新たにする。





学生の感想

島村恭平（4回生、福知山成美高等学校卒）
人工関節手術用のスーツを試着した際、頭が非常に重く、顔の周囲が密封された状況に違和感があり、閉所恐怖症の医師は装着が無理ではないかと感じた。また、事前の預り金から入院診療費を支払うという療養型病院ならではの仕組みには大変驚いた。

森本彩香（4回生、八鹿高等学校卒）
病院実習で訪れた急性期型病院とは異なり、療養型病院のゆったりとした雰囲気が印象的だった。授業だけでは学ぶことのできない病院のバックヤードなどを見ることができ、机上の知識だったものが、より深い理解につながった。特に事務室では、様々な業務内容について丁寧にご説明いただき、病院事務職の担う仕事の幅の広さを再認識した。

原口敦士（4回生、福知山成美高等学校卒）
療養型病院は一般の病院よりも病棟の雰囲気がのんびりした感じだった。CTやMRIという高額の医療機器について、異なるメーカーの機器が採用されていた点が気になったが、医療機器の価格は不安定であるという特徴があると聞き、買い替え時の決定なども重要なマネジメント案件であると感じた。

磯橋智久・大田創（3回生、福知山成美高等学校卒・綾部高等学校卒）
私たちは学会や報告会における発表の場で新しい経験を得た。先生の指示に基づいてスライドを作成することはあっても、数ある医療データの中から自分たちで注目点を見つけ、発表スライドを作るという手法は初めてだった。見知らぬ聴衆の前での発表は非常に緊張したが、楽しくもあり、大変良い経験となった。

竹内絢花（4回生、福知山成美高等学校卒）
見学の際、病院の廊下ですれ違う患者は高齢の方が多かったのですが、笑顔でご挨拶いただくなど声をかけてもらうことが度々あり、私は一般的な病院よりも温かさを感じた。教科書には書かれていないことを感じるために、現場に出て実際に見て学ぶ価値は大きいと再認識することができた。

2017年2月3日

地域協働型実践教育成果報告会



「市民の大学、地域のための大学、世界とともに歩む大学」の基本理念を体現し、地域に根ざし、世界に羽ばたくグローカリスト育成のために全学で取り組む「地域協働型実践教育」の成果を広く大学内外に公開し、学びを共有するために発表の場として実施した。

地域協働型実践教育の受け入れ先としてお世話になった地域の方やグローカリストの先達として地域で活躍するゲストもお招きし、地域協働や実践の重要性や意義について共有する機会とし、全体で成果報告（第1部・第3部）とパネルディスカッション（第2部）の3部構成とした。

≪地域協働型実践教育成果報告会プログラム（2017年2月3日（金））≫

10:40～10:45	開会挨拶、趣旨説明
10:45～12:15	第1部：4回生の成果報告
	講評（受け入れ先の皆さまより）
12:50～13:00	概要説明
13:00～14:20	第2部：地域協働と実践の先人から学ぶパネルディスカッション
	植野　由芙子氏（サンプラザ万助若女将）
	岡部　成幸氏（三和地域協議会事務局長）
	平田　佳宏氏（あやべ市民新聞社経営企画室長）
	コーディネーター：杉岡 秀紀（地域経営学部准教授）
14:30～16:00	第3部：1回生の成果報告
	講評（受け入れ先の皆さまより）
16:00～16:10	閉会挨拶





1部では4回生の各ゼミが発表を行い、福知山の伝統工芸二俣和紙を使って地元の小中学生と灯篭を製作した「竹林と光のプロムナード祭」、「ゆらのガーデン」の若年層への認知度アップの取り組み、兵庫県豊岡市における教育民泊の調査結果などの報告を行った。医療福祉経営学科においては、診療情報管理士テキストの出現頻度などから上位50語を抽出した専門用語集を作成し、学会発表を行ったことの報告があった。

2部では地域で活躍する3名を招き、地域協働実践の必要性についてパネルディスカッションを行った。

3部では1回生の各ゼミが発表を行い、福知山市夜久野町と大江町における地元の祭や集いへの参加を通じて地域住民との交流を図り、インタビュー調査や質問紙調査の分析結果に基づき、調査結果の報告をおこなった。また、調査研究の手法等の学修を目的として、学内での「福知山LIFE満足度調査」を実施した。食生活、バス、アルバイト、娯楽の点について学生対象の調査を実施し、その成果の一部を発表した。

地域協働型実践教育

課外プログラムについて

学生に多様な学びの機会を提供するため、正課の授業以外にも、課外活動として様々な地域協働型の活動を実施している。それらの活動のうち、代表的なものとして以下の3点を紹介する。

01 学生チームが地域イベントに協力！



名称 丹後由良プロジェクト　**時期** 平成28年9月～11月

学生6名（岡本美穂・古泉伊織・小林計介・辻捺乃・平野沙知：地域経営学科1回生、寺本義洋：医療福祉経営学科1回生）が、宮津市の丹後由良地区の「安寿」で開催された「ちーびずリレーマルシェゆら・安寿フェス」（平成28年11月23日）に協力した。

9月からプロジェクトはスタートし、イベントの開催に向けて安寿亭の方々とともにポスターの作成や提供商品の企画に取り組んだ。イベント当日は、あいにくの天気にも負けず試作を重ねた商品（おにぎり）の販売や会場でのお手伝いを行った。




02 デザインの力で老舗店舗の商品をPR！



名称 商店街魅力発信プロジェクト　ふくちやまデザイン・チャレンジ
時期 平成28年11月～平成29年3月



学生3名（梶房明希・辻捺乃：地域経営学科1回生、寺本義洋：医療福祉経営学科1回生）が、福知山まちづくり株式会社や企業経営者やデザイナーらによるNPO法人E-growsの協力を受けて、福知山市の中心市街地にある山城屋茶舗の商品PRに取り組んだ。

大正元年創業の山城屋茶舗は、日本茶と茶道具の専門店で、地元産玉露を用いた「ふくちやま茶」や自家焙煎による「ラテに合うほうじ茶」といった新商品を販売する。学生らは、店主の方々へのインタビューを重ねるとともに、専門家との議論を通して、山城屋茶舗の商品を訴求する媒体を取りまとめる。



03 北近畿の「いいもの」を取材し、デジタルサイネージを作成！



名称 北近畿「いいもの」発信プロジェクト
時期 平成28年10月～平成29年3月



学生7名（岡本美穂・狩山紘一・古泉伊織・小谷大喜・小林計介・辻捺乃：地域経営学科1回生、寺本義洋：医療福祉経営学科1回生）が、JR西日本福知山支社との連携のもと、城崎温泉駅「但馬・丹後いいものショップ」にて販売される様々な地域産品の魅力を発信するため、駅に設置されたディスプレイに映し出すデジタル画像を作成した。

「但馬・丹波いいものショップ」に商品を提供している生産者のうち、10月には4社をピックアップし、各生産者に取材を行った。また、その4社を紹介する画像については、11月の城崎温泉駅リニューアルオープンにあわせて1社あたり5枚、計20枚の画像を作成した。その後も、定期的に地域産品の生産者への取材を続けるとともに、新しいデジタル画像の作成を続けている。

福知山公立大学関連

新聞等掲載記事一覧

【両丹日日新聞】

1 | 両丹日日新聞20160412 【学生全員でクイズラリー】
2 | 両丹日日新聞20160702 【活性化策 若者目線で 公立大生が現地調査　夜久野、大江両町で開始】
3 | 両丹日日新聞20160820 【農家民宿の可能性探る】
4 | 両丹日日新聞20160910 【大江町の活性化考える　京阪神の学生3人 いなか留学で3日間滞在】
5 | 両丹日日新聞20161015 【公立大とJRがコラボ　北近畿の魅力発信に参画】
6 | 両丹日日新聞20161112 【公立大と大江高連携　地域の魅力や課題を検証】
7 | 両丹日日新聞20170201 【地域協働型実践教育の成果報告会】
8 | 両丹日日新聞20170206 【地域協働型実践教育 10か月の研究成果を発表】

【京都新聞】

9 | 京都新聞20160408 【公立大生、学びの地知る】
10 | 京都新聞20160702 【公立大生 地域の「宝」学ぶ　夜久野の漆掻きなどフィールドワーク】
11 | 京都新聞20160709 【竹林照らす灯籠手作り】
12 | 京都新聞20160730 【福知山公立大生 地域実践活動を報告　土産物開発やHP作成】
13 | 京都新聞20160828 【農家民宿の魅力伝える 福知山公立大生が小冊子】
14 | 京都新聞20160918 【由良川ほとり灯籠を飾る】
15 | 京都新聞20160925 【６次産業化で地域振興を】
16 | 京都新聞20161028 【福知山公立大、ＪＲ西と連携　学生感性で丹後特産ＰＲ】
17 | 京都新聞20161124 【宮津産食材で食堂盛況　学生らフェス ミカンやオリーブ使い】
18 | 京都新聞20161217 【地域おこし学生ら議論】
19 | 京都新聞20170204 【学生目線で地域課題共有】

【あやべ市民新聞】

20 | あやべ市民新聞20170201 【地域協働型教育の報告会】

▼両丹日日新聞20170206
【地域協働型実践教育 10か月の研究成果を発表】

地域協働型実践教育
10カ月の研究成果を発表
福知山公立大学



学生たちが順に登壇し、研究の成果を報告した

福知山市西小谷ケ丘、口和起学長）は3日、10月ほどかけて学び進めてきた「地域協働型実践教育」の成果報告会を開いた。3部構成で、1、3両部では学生たちが順に登壇し、来場者たちへ研究の成果を伝えた。第2部はパネルディスカッションをした。

同大学では、地域に根をおろし、世界に羽ばたく人材の育成のための最も重要な取り組みとして、「地域協働型実践教育」を進めている。これまでの成果を一般市民へも発信できればと、広く参加を呼びかけ、学生や関係者も含め、延べ130人が参加した。

第1部では4回生、第3部では1回生が発表。4回生の発表では、4つのゼミの取り組みを紹介した。

学部長を務める平野真教授のゼミでは、地元の小中学生と、伝統工芸の丹後二俣紙を使って灯ろうを作り、蛇ケ端やふぶ光のフロムードを実施することを計画。福知山の観光資源を自ら作り出すことと、若年世代に郷土意識を育てることなどを目的に取り組んだ。

チームとしてイベントに臨みながら、個人でも研究テーマを決めて学んできた。個別には、子どもたちの現状を知る調査をもとに、郷土者も含め、延べ130人が参加した。

第1部では4回生、第3部では1回生が発表。4回生の発表では、4つのゼミの取り組みを紹介した。

学部長を務める平野真教授のゼミでは、地域の資源や資産をどのように見せていくかという戦略も大切だと伝えた。

発表が終わるたびに、学生たちの努力をたたえて来場者たちから温かい拍手が送られた。

第2部では、サンプラザ万助の若女将・植意識を育てるため、地元の資源の見直しをした。伝統工芸や特産物など焦点を当て、調査・分析した結果を説明した。

伝統工芸である丹後二俣紙の文化・産業を残すための工夫については、和紙を芳香剤のスティックの部分に使用するなど、特性を生かした製品化を提案した。

また、地域の資源や資産をどのように見せていくかという戦略も大切だと伝えた。

発表が終わるたびに、学生たちの努力をたたえて来場者たちから温かい拍手が送られた。

第2部では、サンプラザ万助の若女将・植意識を育てるため、地元の資源の見直しをした。伝統工芸や特産物部成幸さん、あやべ市民新聞社経営企画室長・平田佳宏さんらによる「地域協働と実践の先人から学ぶパネルディスカッション」もあった。

▼両丹日日新聞20160702
【活性化策 若者目線で 公立大生が現地調査　夜久野、大江両町で開始】

活性化策 若者目線で
公立大生が現地調査
夜久野、大江両町で開始
地元の人と意見交換 新鮮なアイデアに期待

今春開学した福知山市西小谷ケ丘、福知山公立大学（井口和起学長）の地域経営学科1回生が、1日から夜久野、大江両町で、まちの活性化を考えるフィールドワーク（現地調査）を始めた。夜久野町では、住民主導組織「夜久野みらいまちづくり協議会（衣川裕次会長）」メンバーの案内で、学生20人がバスで町内を巡り、意見交換をして町の資源を生かすアイデアを提案した。


活発に意見を交わす学生と協議会メンバーら

フィールドワークは、基礎力調査で、地域を調べる力・分析する力を養う狙いで実施した。夜久野町を訪ねたのは岩手、愛知、岡山、兵庫県などの出身者。年間を通して定期的に同町を訪れる計画で、今回は視察や協議会との交流をした。

公立大でバスに乗車した学生たちは、協議会メンバーから説明を受けながら移動。地元7自治会で地域活性化の取り組みを続ける畑地域、府最観音産に登録されている「小倉のやくの玄武岩公園」、やくの高原の遊歩道、匠の郷にある「やくの木と匠の館」などを訪れ、現状を知る一方、魅力を発掘した。

このあと、額田の夜久野ふれあいプラザで意見交換会があり、協議会メンバーら15人とともに4グループに分かれて話し合った。

協議会メンバーは「組織の会員は年齢層が高く、若者の声を反映させた活動ができていない。まちづくりのアイデアを聞きたい」と発言した。

学生の大半は都市部の出身で、夜久野を巡っての感想につい「何もないけど、田舎の良さを活性化に使えそう」「歴史があり、自然が豊か」「街灯が少なく、寂しい」「心が安らぐ」と素直な感想を語った。

さらに「京都唯一の火山・亀山を生かした土産物を開発してほしい」「川がとてもきれいなので水タクルツアーを考えては」「耕作放棄地をもっと使って都会の人たちに農業体験をしてもらえばよい」「たくさんある空き家での宿泊体験の実施を」「街灯が少ないので、暗く寝る町として売り出そう」と次々に提案した。

衣川会長は「今まで気付かなかった新鮮なアイデアが飛び出した。今後も学生さんたちの発想や専門知識を持つ先方の力を借りて、夢プランを温めていきたいと期待していた。

公立大の地域との総合窓口となる、北近畿地域連携センターの江上直樹助教は「取り組みは本学が導入した全国初の地域実践型教育の一環です。前期に地域が抱える問題点や魅力を探り、後期にテーマを決めて具体的に研究を進めたい」と話していた。

大江町では21人が4コースで視察

大江町では学生21人が、大江山酒呑童子の里、毛原（細田・フルーベリーガーデン、元伊勢内宮神社、京都丹後鉄道大江駅周辺の4コースに分かれて視察し、地元住民から説明を受けた。

▼両丹日日新聞20161015
【公立大とJRがコラボ　北近畿の魅力発信に参画】

公立大とJRがコラボ
北近畿の魅力発信に参画
城崎温泉駅 特産品PRのシナリオ作り
福知山支社からの依頼受け


城崎温泉駅の待合室のイメージ図。左奥が店舗になる

和起学長）は、地域協働型教育研究の一環で、JR西日本福知山支社が進める北近畿の山陰線の城崎温泉駅の構内新店舗に置く地域特産品などの魅力発信に参画する。最初の取り組みとして、11月上旬にオープンする城崎温泉駅にあるキヨスク店舗が、駅のリニューアルに合わせて、但馬や丹後地方の特産品を充実させた新店舗（32平方㍍）に変わる。これを機に、JR福知山支社が、地域経営学科のある公立大の北近畿地域連携センターに、若者ならではの感性と視点を生かし、情報発信面などで協力を依頼した。

企業と連携した取り組みで、学生の教育機会につながる点から、これを快諾した公立大では、地域経営学科の1回生の中から希望者5人を募り、研究グループを組織した。

10月中旬から、製造業者を訪ねて取材し、業者の歴史やこだわり、商品の特徴、PRなどそれぞれの商品が持つ〝物語〟を、新店舗近くに設置する60インチのディスプレイやJR福知山支社が作成するホームページを通して紹介する。

今後は、丹波も含めた北近畿エリアの地域特産品を対象に、京阪神でのPRにも取り組む予定。将来的には、駅店舗で販売するのにふさわしい商品の発掘もする。

▼両丹日日新聞20161112
【公立大と大江高連携　地域の魅力や課題を検証】

公立大と大江高連携
地域の魅力や課題を検証
内宮など現地で調査 より深い学習を実現

福知山市西小谷ケ丘、福知山公立大学の学生と大江町金屋、大江高校の生徒が11日、合同で町内を巡り、地域を知る学習に取り組んだ。住民らと直接話を聴き、大江の魅力や課題を探った。


大江元気プロジェクトの河口代表（右）の内宮などでの取り組みの内容などを聴く学生と生徒

参加したのは4月から、地域で活躍している人から話を聴き、調査にあたった「いづみや」を訪れた班は、同内宮の古民家を改装した茶席の場「いづみや」を訪れた班は、同所を拠点に地域活性化の取り組みを進める「大江元気プロジェクト」の河口珠輝代表（53）に活動の状況などを聞いた。

河口代表は、水害や高齢化などの影響で元気がなくなってきた大江地域を活気付けるためにプロジェクトを結成したいきさつを話し、「元伊勢内宮、外宮神社などを回るモニターツアーの開催、内宮の神社参道で開いたイベント「参道ルンヒ」などについて説明した。

学生、生徒たちはマルシェ、モニターツアーの内容などについて質問し、いづみやの改修の状況も見た。

このあと各班が立ち寄って聴いてきた内容を振り返るグループワークをした。

公立大1年の辻照乃さん（19）は「今回の学習は大江のみなさんと触れ合え、地域性や歴史、文化などを再認識できた。一緒に学ぶことができて良かった」と喜んでいた。

大江高3年の眞下成也君は「公立との学習は新鮮で、普段の仕方から勉強になるところが多かった」と話していた。